

# Reprint of Komyo Banashi (Volume3 Part2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江本, 裕[編] メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5787">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5787</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 『功名咄』六（下巻ノ下）

江 本 裕 編

## 承 前

今稿も前号同様、作品の概略説明と凡例を省略する。今巻下ノ下で翻刻は完結する。しかして、大洲市立図書館本は五冊であるため、「大田小三郎咄」までで、以下で対校できる本は、金沢大学北条文庫本だけである。

今稿の初校も井高美妃（本学大学院修士課程修了）が作成し、それを江本が校閲した。従って最終的な文責は江本にあることを銘記しておく。便宜ここでは、巻六ノ下に存する目録のみを付載する。

## 功名咄下巻ノ下目録

一 真田出丸咄	一 久嶋咄	一 黒田咄
一 井上周防咄	一 大田小三郎咄	一 篠田咄
一 荒井咄	一 磯崎咄	一 平野弥二右エ門咄
一 原田咄	一 高垣咄	一 柿崎咄
一 久幹内室咄	一 瀬尾・芝山咄	一 室節弥生咄
一 佐振咄	一 猪野田・大塚咄	一 加藤・河村咄

『功名咄』六（下巻ノ下）

一 安井咄 一 福斎咄 一 因幡石州咄

一 大坂冬陳ノ節、真田左エ門佐殿ハ真田ガ出丸ト云テ、大坂城惣構ノ外ニ一人離テ堀一重ヲ隔、城内ヘ橋一ツ渡シテ被籠居ケルトカヤ。扱、如何ナル故トハ知ズ加賀ノ軍勢、越前勢・井伊掃部頭殿軍勢モ責シトカヤ。然ル所ニ、真田ハ素もとより思設しよせつナルコトニテ、少シモ騒さわ氣色モナク、韓信ガ舟筏ヲ流セシ如ク後ノ橋ヲ引、軍勢ノ心ヲ一致ニ治メ、寄手夜中ニ堀底岸ノ下ニ着テケルトモ、我軍勢ヲ静々下知シテ、矢鉄砲ノ一ヲモ不射出、夜ノ明ルヲゾ待居タル。已夜モシラタト明ケレハ、木石ヲ落シ、寄手是ニ騒みだる乱ル所ヲ弓鉄砲ヲ以テ討取ケル程ニ、寄手大勢被討ケルトカヤ。其時、越前ノ軍勢ヲハ水野谷伊勢守殿從弟ニ、水野谷左京ト云者有。此左京ニ、「軍勢ヲ可引揚」由ヲ被仰付ケレバ、鎧三両迄着シテ、真田カ出丸ノ堀ノ外端迄馬ヲ静ニ乗寄、馬ヲ横馬ニ立テ、「水野谷左京是ニ有リ。軍勢一人不殘可引揚」由下知セラレケレバ、城内ヨリ矢鉄砲放カクルコト如雨降。然トモ、軍勢引揚ル内ハ少モ不退、惣軍引取ケル跡ヨリ馬ヲ静ニ乗テ引揚ケルト也。

扱、陳屋ヘ帰り、具足ヲ脱ケル所ニ、具足ノ間ヨリ鉄砲ノ玉七ツ迄コロヒ落ケルト云ヘリ。此軍勢引揚ケル節、越前少將殿弟出羽

守殿〔此人年経後、雲州ノ成守護ト〕其年十六才ニ成給ヒケルガ、軍勢ヲ下知シテ乘廻々引退給ヒケルヲ、真田城内ヨリ見テ、「見コトニヤ思ケン。大将ト見申侍ル。引返し給へ」ト招キカクル。出羽守殿、是ヲ聞テ取テ返シ給フ所ヲ家中ノ侍一人馬ノ口ニ取付テ、「諸者御無用ニ侍ル」ト諫ケレトモ、「敵ニ招カケラレテ不返ト云コトヤ有」トテ、「放セ々」ト宣給ヒテ鎧ノ鼻ヲ以テ蹴放テ取テ返シ、堀端迄乗着給フ。真田ハ見之、味方ノ矢留セサセテ、「若大将ト見申シテ侍ルガ、扱々見事ナル武者振哉」ト褒テ、「早々引退給へ」ト云シトカヤ。又、其時ノコトカトヨ、井伊掃部頭殿ノ軍勢ヲハ、掃部頭殿家頼ニ岡本半助兩人下知シテ引揚ルト也。右兩人軍勢ヲ乘廻シタ引揚給ケルニ、弓鉄炮ノハゲシキコト如雨降。掃部頭殿、「弓鉄炮ノ烈ク可有如何」ト宣ヒケレハ、半助カ云ク、「不可有御氣遣。此鉄炮ハ不当鉄炮也」ト云テ、堀際迄数篇乘廻シケル様子見コトト云モ有余ト云々。

誠ニ真田左エ門佐殿、術我兵ヲ死地ニ墮シテ戦コト韓信ガ術ニ相同シ。然レトモ、天道智將法ノ五ツノ道理ハ、能々工夫勤弁仕テモ難叶カラン欤。水野谷左京ガ働ハ、最成安カラン者欤。其故ハ、我重鎧ヲ重着テ堀際ニ乗寄、横馬ニ立テ軍勢ヲ下知セハ、敵大将ト見テ城内ノ鉄炮過半我ヲ目当トシテ鉄炮ヲ放サン。其間ニ安々ト引取セン者ヲト思所ニアリ。最勇・智・謀ノ三ツ兼備セスンバ不可成。扱又、出羽守殿働モ若武者ニハ潔働也。家中ノ士、馬ノ口ニ取付留ケルコト一端ハ最也。強テハ無用ノ儀タルヘシ。是大勢ノ敵陣ヘ駈入給フ儀ナラバ危キ儀也。強ク制テ留リ不給ハ、共ニ駈入テ討死スベシ。是又、矢鉄炮ノ烈計也。矢鉄炮ノ烈ハ遠近ニ不寄。唯運命ニ寄ナレバ様子ヨク留度者也。去ハ、戰場ニ趣カン時ハ、必死ト定テ生死ヲハ運命ニ任テ、様子ヨク働給ヘカシト思フ所也。又、岡本半助ガ掃部頭殿ヘ、「不可有御氣遣。不当鉄炮ニテ侍ル」ト云テ、掃部頭殿供シテ豎横ニノリ廻シ引揚ケルコト、不当ト云習アリ。去ハ、鉄炮一ツ宛ホツ

チ々ト時々鳴鉄炮ハ当ル物也。ツルベ放ト云ツケ、大勢一度ニ放ツ鉄炮ハ不当者也。大勢一度ニ放ス時ハ不成心。必ス心ソ、ツテ不当者也。是秘術ノ習也。右此不当ト云コトヲ鹿狩等ニタメシテ試所ニ前ニ如云ト云リ。最秘事スヘキ儀也。能々勤弁仕給へ。

一 享祿・天文ノ比ハ、日本一州乱国ナラズト云所ナシ。然ルニ、関八州ヲバ上杉官領ト云テ、其比ハ兩家ト成テ、相州鎌倉山内ニハ上杉朝康、上州扇ガ谷ニハ上杉則政在城シテ、関八州ノ官領職トシテ居住仕給ヒケル。又、伊豆・相模兩國ヲバ古ノ北條ノ高時ノ末北條二郎時行、太平記ノ末ニ將軍方ヘ和睦シテ、伊豆・相模ノ二州ヲ得テ、二、三代ハ在シトカヤ。其末飛越御所ト云テ在シカトモ、其威甚衰テ、諸人蔑ニシテ在カ無カト云ガ如ク成ヌ。

小田原北條ノ先祖伊勢新九郎〔後ニハ伊豆ノ宗雲ト云〕ト云宰人ニテ、諸国武者執行トテ侍五人連ニテ被遊行ケルガ、駿州ノ今川家ニタヨリテ、伊豆ノ國ヲ治取シトカヤ。其武者修行ノ連五人ハ、松田・大道寺・大藤・額塚・大石ナト云者共、後ニハ家頼ト成シト云リ。是皆、山城国宇治・田原辺ノ武士トモ也ト云々。去ハ、次第二勢強ク大ニ成テ、元祖氏重、二代目氏綱、三代目氏康也。此時ハ、早武州ヲ大半手ニ入、武州川越ノ城ニ北條左エ門太夫綱成ヲ大将トシテ、銃卒五百人ヲ被籠置ケルト云リ。然ルニ、上杉則政・上杉朝康兩旗ヲ被出、川越城ヲ可責トテ栢原ニ陳シ給フ。其勢八万六千余ト云リ。北條氏康ハ其年未二十四才ノ若武者タリト云トモ、武功逞クシテ少シモ恐ル氣色モ無。相豆ノ軍勢纔八千ヲ卒シテ後誥仕給ヒケレバ、兩上杉八万六千余ノ軍兵ヲ卒シテ北條ニ向フ。氏康其銃氣ヲ為メ、避引退給ヘハ、兩上杉又川越城ヲ責ントス。

氏康又打出給ヘバ、如前八万六千余ヲ卒シテ氏康ニ向フ。如此スルコト兩三度ニ及シカハ、上杉勢氣勞テ氏康ニ不向、「譬氏康出タリトモ、何コトカアラン。其俣指置ヘシ。イツ払ハンモ尤可然」

ト云テ、用心ヲモセスウカノトシテ在陳シケル。敵ノ為レ躰能々見澄夜軍ノ評定シテ謀計皆調ヌト云トモ、此評定ヲ川越ノ城ヘハ不通、「此戦危カルヘシ。如何セン」ト思煩給所ニ、久嶋弁千代ト云テ、北條左エ門大夫ノ弟、生年十六才ニ成ケルガ、其形美麗ナル児小性ナルニ依、氏康寵愛セラレ、傍ニ被召仕ケルガ、此由ヲ聞テ、「今度ノ御使ヲハ私ニ被仰付侍レ。私一騎城内ヘ乗込委細申可通。万一為敵被為擄儀モ侍ラハ、譬骨ヲ賽ニ被刻侍レ<sup>①</sup>トモ、少モ不可申。扱覚申侍上ハ不被遣ハ自殺仕ナン」ト云ケレハ、氏康聞給テ、「扱々無為方儀也。左有ハ汝ヲ可遣。扱如何シテカハ可行トハ思フゾ」ト宣ヘバ、「敵猛勢ニテ中々紛安シ。如我若者ヲヤハカ敵トハ思ヘカラズ。無事故城中ヘ入侍バ、城内ニテ狼煙ヲ揚ヘシ」ト云ツテ、花ヤカナ装束シテ馬ニ打乗、夜ノ東雲ト明ル比ヲヒ敵陳ヘ乗入テ、陳中ヲ彼方此方ヘ責馬ノ如ク乗廻々乗行ケルニ、諸人は見テ、「誰人ノ小姓哉覽、終ニ不見馴。扱々美麗ナル者哉。今度乘戻カシ、見度コトヤ」ト思計ニテ、敵ニテ可有トハ夢ニモ不知シテ通ケルト云リ。

弁千代彼方此方ヘ乗廻、無何事故川越城ヘ乗込、狼煙ヲ揚タリケレバ、氏康モ被為案堵ケルト云リ。其故ハ、氏康可被懸夜合戦候、「其時城内ヨリハ兵一人ヲモ不可出。度々闕ヲ揚、城内ヨリ駈出ル勢ヲ見セヨ」ト也。又、出テ戦時ハ同士討有之コトヲ恐ル。万一味方敗軍スルコトモ有バ、其時城内ノ軍勢ヲ以テ救ガ為也。是則扣軍シマリ備ト云ニ同シ。然ルニ、上杉軍勢ヲ不分、八万六千ノ大軍ヲ稲麻竹葎、見物ノ場ノ如ク一所ニ茫然ト宿タル所ヲ、不意ニ懸テ戦ケルニ依テ、俄騒立テ、何処ヲ敵、何処ヲ味方ノ旗本ト云コトヲモ不弁、上ヲ下ヘト渾乱シテ、大軍靡立テ敗軍ヲ仕ケルト云々。是ヲ川越夜軍トハ云也。

誠ニ、此氏康ハ北條五代ノ内ニハ勝テ名將也。此故、傍ニ被召仕ケル弁千代ト云若輩者迄如此ノ働ヲスルコト、奇妙ト云ヘキ者也。去ハ、父タル者ノ子ヲ不愛者ハアラン<sup>②</sup>。左有バ何ソ武ノ道ヲ不

『功名咄』六（下巻ノ下）

教ヤ。子ニ教ヲ以テ慈トス。又ハ、子孫相續スルハ先祖ヘノ孝第一也ト云ハ、兎角ニ武士タル者ハ幼少ヨリ我家行ヲ勤教サランヤ。其家ニ生ナガラ其業ノ疎招恥辱似リ。其業疎ンテ不得恥辱者ハ、実ニ不思議ノ幸也ト云ヘシ。此久嶋弁千代ガ働、何ノ書伝ニモ不見故ニ、爰ニ書スルモノ也。弁千代微弱タリト云ヘトモ、名將ニ仕ヘシ故ニ、心至テ猛ク敵八万六千余ノ心ヲ了<sup>サト</sup>了、知智ヲ得タリト云ヘシ。去ハ、万一敵ノ為ニ擄ト成コト有ハ、若輩者ニテ馬ニ被引、不成心敵中ニ来レリ。何コトヲカ可知免、給ヘカシト可云ト思量シテ、謂出ツラン。最敵モ壯年ノ男ヨリ見免コト有ヘシ。彼是ノ慮トモ最殊勝也。

①レ↓三本共通すれど「ル」とあるべきか。②ン↓シ（大）。

一 関ヶ原合戦ノ刻、黒田筑前守長政ハ、其長子甲斐守殿ヘ家督ヲ譲リ、法名如水ト云テ、九州ノ内豊前小倉ノ城ニ居給ヒ、子息甲斐守殿ハ、権現様御同道ニテ関東ニ下向有シ。其跡ニテ、石田治部少輔、謀叛シテ東西敵味方トハ成リ。其砌、黒田如水ヨリ関東ヘ使者ヲ下シ給ヒケルニ、大左文字ノ小脇指ヲ被遣被宣遣ケルハ、「今天下ニツニ割テ運ヲ任天、家ノ安否ヲ爰ニ窮スル時也。被開運、被致帰城侍ラバ、目出度可為対面。万一合戦ニ討負タランニ於テハ、此脇指ヲ以テ可為切腹」由ヲ被宣遣ケルト云リ。然ルニ、関東方討勝給ヒ、二度帰城有シニ依テ、此小脇指ヲ佐夜ノ中山ト云異名ヲ付、家ニ伝ヘ被為秘藏ケルト云リ。去ハ、西行法師ガ名歌ニ、「年ヲヘテ又越ヘシト思ヒキヤ命也ケリ佐夜ノ中山」、此歌ノ心也。然ルニ、黒田如水、元来大氣剛強ナル人ニテ、隠居留守居ノ身ナレハ、小勢也ト云ヘトモ、九州ニテ高麗陳ノ時分、身代破滅シタル大友ノ何某、上方ノ催シニ依テ謀叛ヲ起シ、生国豊後国ニ討テ出近境ヲ奪フ。所々石垣原（豊後豊前ノ境カ。不知其因）ニ馳向テ合戦シテ討勝給ヒ、則大将共ニ討取給ヒシニ依テ、豊後即時ニ平均ス。弥兵ヲ調、九州不残攻順給ハント被為儀ケル所ニ、

関ヶ原合戦落去シテ、天下静謐ノ由注進有ケルニ依テ、如水、小倉ノ城ニ引入給ヒシト云ヘリ。是ヲ筑紫ノ石垣原合戦トハ云シト也。

其後、如水子息甲斐守殿ニ対面有シ刻宣ヒケルハ、「扱々其方若氣ニテ不<sub>レ</sub>弃<sub>二</sub>物心<sub>一</sub>。何トソ関東ニテ謀計ヲ廻シ、内府ノ上洛及延引、関ヶ原合戦五十日不<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>落去<sub>一</sub>、筑紫ハ不及申中国迄モ可攻孰者ヲ無念至極也」トテ被抓頭ケルト也。其後、権現様御前ニテ、或人、「黒田筑前ハ唯今法躰シテ如水ト申シテ、後生一篇ニテ引籠罷在侍ル」ト云バ、「右之様子ヲ御存在ケル欵、其如水ガ後生一篇猶以怖シ」ト 上意有シト云々。

誠ニ、如水ハ智恵才覚有シ人也ト云伝侍ル。元来ハ幡州姫路ノ城主ノ一族タリシカ、江州安土織田信長ヘ為人質被參ケルヲ、羽柴筑前守殿、幡州ヘ下向ノ砌為案内者ト被指添ケルト云リ。其時分ハ、小寺官兵衛ト名乗給シ。古ノ赤松家頼、小寺相模ガ末孫也トモ云リ。此関ヶ原合戦落去シテ、黒田殿ヘハ、「播磨カ筑前カ兩國ノ内ニテ所望次第ニ可被遣」由 上意有シ所ニ、甲斐守殿御親父、如水ヘ被為相談ケレバ、如水宣ヒケルハ、「幡州ハ大國ト云上國ト云ヒ 旁<sub>カ</sub>以所望ニハ侍トモ、我生國ニテ能知り、人ノ心根賢シテ難治リ國也。筑前ハ下國ノ少國タリト云ヘトモ、辺土ナルヲ以テ如何ニモ正路正直也。爰以治リ安カラシカト思フ所也。筑前ヲ可申請由申給ヘ」ト宣シニ依テ、筑前ヲ拝領仕給ヒケルト云ヘリ。去ハ、今ノ世ニ取テ思フ所ニモ、幡州ハ場中ニシテ悪シ。

其節、池田三左エ門殿ハ 権現様ノ躰公トシテ時メキ給ヒ、備前・播磨・淡路三ヶ國並ヘテ拝領有シカトモ、二代目ニハ替リ給ヒシ。爰以テ悪シ、黒田ハ今以不替ト云リ。実ニ、智者ハ百年ヲモ能知ル所羨敷者也。去ハ、人ノ子孫不衰シテ、数代盛ナル者ハアラシ。其身時ニ合テ威勢有トモ、場中ノ居屋敷上々ノ所領ハ少シ。遠慮有ヘキ者欵。二代目、三代目ニ反易有コト常ノ習也。如水モ此所ノ遠慮モ有ケルカ不審。

一 筑紫石垣原合戦ノ時分、黒田如水カ家頼ニ井上九郎右エ門ト云者、其比ハ未二十四、五才ニ成シカトモ、一軍ヲ預リテ在シニ、我備シ山ノ尾崎ヨリ尾ヲ三ツ隔テ、大友ノ軍勢十四、五騎見ヘシ所ニ組ノ侍ニ仰セテ、「敵大勢跡ニ続ケルカ又不続欵。其分際ヲ見切テ可帰」由申付テ遣シケル欵、其侍半途ニモ不帰。以前ニ九郎右エ門武見ノ為トテ自身乗出ケルニ、組ノ侍、「敵ノ軍勢後ニ不続」ト云ハ、九郎右エ門、「通スマジ」トテ、我若党十人計、組ノ侍ニ騎討テ懸ケルニ、九郎右エ門如何思ケン、兩ノ籠手ヲ引切テ投ケ捨、十文字ヲ以テ突テ懸リ、敵七、八騎討取ヌ。其内組ノ侍二人モ首ヲ取ヌトカヤ。夫ヨリ引テ帰ル所ニ、敵大友ガ家老吉弘嘉兵衛ト云者、其場ヲ筋違ニ討テ通ケル所ヲ、九郎右エ門是ヲ見付テ、「其ヲ通ハ吉弘加兵衛ト見タリ。引返シ尋常ニ勝負ヲセヨヤ」ト呼懸ケル。加兵衛、「心得タリ」トテ、馬ノ手綱ヲ返シテ乗テ来ケル内ニ、僕從ニ為持タル鉄炮ヲ執テ放シケレトモ、九郎右エ門運ヤ強カリケン、甲ノ立物ニ当ル。加兵衛、九郎右エ門共ニ馬ヲバ乗放シ、鎧ヲ取テ決勝負ケルニ、加兵衛直鎧ニテ突外ケル所ヲ、九郎右エ門十文字ニテ突倒シ、首ヲ執シト云々。

誠、此九郎右エ門ガ働、勇武剛強ニ非ンハ成ヘカラズ。乍去、組頭役ニモ仕、一軍ヲ預ヌル身トシテハ不似合シテ悪シ。一手ヲモ預者ハ、左様ノ軽キ働ニハ不掛目ヲモ、敵ノ大勢ヲ我少弱ノ一手ヲ以テ如討取、以我智謀敵勢ノ屈曲スル如クスルヲコソ、手柄トハ云也。又、武見ニ行シ武士モ其心得ヲ不知ト云ベシ。去ハ、乱國ノ時分、関東ニテ何ノ家頼、其名名字ヲモ不覚、親子シテ一軍ヲ官<sub>つかさど</sub>テ山ノ麓ニ備、大将ノ御陳ハ山ノ尾崎ニ備給ヒシニ、親子敵ニ懸テ戦ヌヘキコトヲ談シテ、親大将ノ陳ニ行テ申上、戦ヲ初ナンニ窮、我備ニ帰テ懸タランハ遅シ。又ハ其子若キ者ニハ規模ナシ。「可懸相談ニ窮タラハ、山ノ尾ヲ下リ様ニ扇ヲ可仕。不懸相談ナラバ、扇ヲ仕ヘカラス」ト約諾シテ、大将ノ陳ニ行テ如約諾扇ヲ仕シニ依テ、其子不意ニ軍ヲ発シ敵ニ懸ケルニ依テ、

大勢討取ケルト也。如何ソ此組ノ武士モ武見ニ行ハ、此約束ヲ成サランヤ。又、九郎右エ門ガ鍵前ニ臨テ箠手ヲカナクリ捨タルハ、窮屈ナル所有ケル欵。鍵ヲ仕ニハ籠手ノ有ト無トハ無ガ益タルヘシヤ。但シ、鍵ノ流基ニモ依ヘシ。常々、具足・甲・籠手ヲモ掛テ試ザリケルハ、不心懸トモ云ヘシ。コトノ急ナルニ臨テ、カナクリ捨タル躰、勇氣ニハ見ナンナレトモ、本意ヲ詮議スル時ハ不心懸ニ似タリ。大坂陳天王寺表ニ於テ、淺野采女正殿家頼ノ内、其名字ハ不覚、鍵ノ柄長クシテ邪魔ニナルトテ、敵前五、六町ノ内ニテ脇指ヲ拔テ、鍵ノ柄ヲ切折ケレハ、其躰ノ威目敷勇ニ見ヘケレバ、傍ノ者トモ見之、脇指ヲ拔テ切折シ族多シトカヤ。

最前切折シ者ハ、能々思量仕テ切折ツランナレバ、我心ニモ叶ヒツランカ。其躰威目敷ト云計ニテ切タル族ハ、鍵短ク杖ノ如クニ成テ難義セシ者有シト也。

誠ニ、血氣ノ勇者何ノ時分ト云トモ、左モ有ランカシ。又、吉弘加兵衛、敵ニ被呼懸テ返シテ決勝負コト悪シ。此加兵衛ハ其以前窄人シテ、九郎右エ門ニ三ヶ年迄被扶助テ在シト也。此故ニ、九郎右エ門ハ見知タリケルカ。大躰武見ノ武士ヲタニ無左ト敵ト不力①勝負ヲ、懇ニ敵ノ為レ躰、其場ノ善悪ヲ見テ帰ルヲ以テ善トス。況ヤ増テ大友家ノ家老共被云者、敵ニ被呼懸タリト引返、決勝負ヲコト短慮ト云、不忠ト云ヒ、旁以大友家ノ亡タルコト、此加兵衛ガ一人ノ働ニテモ被知侍ル。

扱、此加兵衛ガ如ク敵ニ被呼懸タラン時、可為如何ト云者アラバ、僕従ヲ一人返シテ、「夫ニ居給フハ九郎右エ門殿ニテ侍欵。久シク不為対面シテ御床敷コソ侍レ。我等モ所用有之テ罷出侍ル俛、先罷帰テ侍ル。重テ対面可申」トサワラヌ様ニ取成テ可帰ト也。是臆シテコトヲ左右ニ寄スルニ似タリト云トモ、左ニハ非ス。大躰武見武者タニ僂忽ニ不為勝負ヲハ者也。増テ家老タラン者ヲヤ。又、加兵衛乘懸ル内ニ、僕従ニ為持タル鉄炮ヲ取テ馬上ニテ打シコト、是モ悪シ。鉄炮ニテ打ントナラバ、難所ヲ前ニ当敵ヲ侍請

『功名咄』六（下巻ノ下）

テ可討コト也。去バ、間いそがわし敷時ニハ、如何ニ静リテモ越ス者也。故人ヲハ腰ヲ目当ニスル馬上武者ヲバ、鞍ノ前輪ヲ目当トスル習也。間敷時分ニハ、兎角ニ先見当ヲ見出ス故越ス者也ト云ヘリ。此故ニ、修羅鉄炮ヲハ段見ニスルコト常ノ習也。加兵衛鍵ニテ突外タルコト、素ヨリ鍵ノ下手ニテヤ有ケン、運ヤ尽タリケン、不及是非所也。此九郎右エ門、後ニハ知行三万石ヲ得テ、井上周防ト名乗テ、黒田家ノ家老職ト成シハ、花毛実モ有シト知ヘシ。此旨思量仕給ヘ。

①力↓為（大・金）。

一 寛永ノ比、備前国岡山城主ヲハ、松平宮内少輔殿トソ申ケル。其家頼ニ、太田小三郎ト云者アリ。此者ハ、宮内少輔殿台所奉行太田ノ何某ト云者ノ子也。其比、未タ若キ者ニテ、鬼子男伊達ヲ仕テ遍廻リケルヲ、何国モ世ノ習嫉ム者共数多アリテ、何方ニテ成トモ、彼小三郎ニ悉ク与恥辱、可為矢面目コトヲ巧ケルト也。去程ニ、若者共寄合テ云様、「定テ彼小三郎、今月八日ニ薬師参詣ヲ不為コトハ有ヘカラス。薬師堂ニ侍請テ両方ヨリ捕ヘテ広庭ニ引出シ、悉ク踏ミ打着シテ与恥辱、向後人交リモ不成様ニ可為」由ヲ巧談ケルヲ、其座ニ有ケル者ノ云ク、「小三郎モ流石ノ男ナレバ、左様ニ思俛ニハ不可成」ト云バ、「見給ヘ。恥辱ヲ与テ見セ申サン」ト云ヌ。又傍ノ人、此コトヲ密ニ太田小三郎ニ告知シケレバ、若者トモ覚有コトヲ巧ケル間、「今月八日ニハ、必薬師参詣無用ニ侍ル。危儀也」ト語ル。小三郎、「誠ニ思召寄御知セノ段、先以過分至極ニ侍ル。乍去、彼奴原ガ何十人来リ候トモ、左様ニ手籠ニハ成間敷者」ト云バ、「最可有左コトナカラ油断剛敵」ト申侍ル。「必御油断不可有」ト云。「心得侍ル」ト云テ退出ス。

其後、小三郎思様、「今月八日薬師堂ニ於テ、相待トキ、ナガラ不為参詣、臆シテ脱タルニ似タル成ヘシ。可為参詣者ヲ」ト思ヒ、

覚悟ヲ窮、「譬ヒ敵ハ何十人有トモ不引一足、可為討果者ヲ」ト  
思定テ、八日ノ黄昏ニ及テ白キ帷子ヲ着シ、尻ヲ高々トカラゲ、  
刀ノ鏢本ヲクツロケ、薬師堂參詣仕ケル所ニ、如案若男兩人、堂  
ノ階ニ立添テ兩方ニ一人宛立リ。小三郎ハ、素ヨリ覚悟セシコト  
ナレバ、臆タル気色モナク、彼男共ヲ瞰ヘ立寄バ、抜打ニ可為  
ト刀ノ柄ニ手ヲ掛、兩人ノ真中ヲ百度通り、刀ヲスリト抜テ、  
參錢櫃ニ立掛置、鏢口ヲ鳴シ、仏前ヲ拜シ、「松宮内田三郎刀ハ  
竹屋方曲尺式尺七寸、関ノ禪定兼吉作、唯今仏前ニ於テ誼誑仕候。  
諸願成就皆令満足」ト伏拜ミ振向テ、彼兩人ニ可討懸トスル所ニ、  
彼兩人此勢ニ恐テ、逃去テ不居ト也。小三郎ハ静ニ刀ヲ鞘ニ納、  
用心緊シテ帰宅スト云々。

誠ニ、此太田小三郎ガ勇氣、最若キ者ニハ可有左モ。誰々モ武ノ  
家ニ生レシ者、柔弱シテハ不可叶。第一、勇氣ヲ常々可勵コト也。  
乍去、小三郎カ常々ニ鬼子男伊達ハ強過テ惡シ。常ニ主君・兩親  
ニ事、兄弟・朋友ノ交リニハ柔ヲ用ヒ、又如此ノ臨節ニ時ニハ、  
金鉄ノ勇士可成ト常ニ嗜ミ思フヘキ儀也。此小三郎、常々剛強ノ  
男ナカラ、猶改テ一足モ引間敷者ヲト覚悟ヲ窮、薬師參詣ヲハ仕  
タリ。扱コソ此小三郎、必死ノ男タルニ依テ、其心根金鉄ニ等シ。  
故ニ向敵臆シケル者也。去ハ、蜷川新左衛門ガ辞製①ニモ、「生  
ケル其魄ニ死ケレバ今日ノ夕部ハ松風ノ吹」。又新右衛門ト太刀  
打仕ケル時、道者ナラバ歌誦ト云バ、「打太刀ノ金ノ響ニ夢覺テ  
衣脱ノカラニ鶏ノ聲」ト誦リ。又、太田道灌ヲ鏹付テ、「道者ナ  
ラハ歌誦」ト被云テ、聲ノ下ヨリ、「カ、ル時左コソ命ノ惜カラ  
メ兼テ無身ト思ヒ知ラズハ」ト誦リ。右兩人ハ高名道者ト被云シ  
人如此。去ハ、武士モ常ニ一命ヲ捨ル習、死習事專一也。常々此  
身ヲ捨習死習テサヘ、誠ニ二十死ノ時ニハ動転ノ氣出来ヘシ。仏教  
ニモ、「思身一念ヲコソ六道ヲ引廻ル鬼」トハ云ナレ。故ニ常々  
思身一念ヲ切捨テ、義勇ヲ勵シ給ヘ。又小三郎ガ可討果ト思フ所  
ハ白キ帷子ヲ着シケルハ、無功ノ至也。殊ニ夜陰ニハ覺有所ヘハ、

黒キ着衣ヲ好コト常ノ習也。又、主君ノ御名我名字ヲモ略シテ  
云シコトハ面白シ。覺有時、実名ヲ名乗ヘキ時ニモ非ズ。又薬師  
堂ヨリ帰ケル道ヲ用心セシハ最至極也。去ハ、武州江戸御城御普  
請ノ時分、辻切ヲスル者アリテ、石垣石ヲ取集置ケル、石ノ間ニ  
隠居テ相待ケル処ニ、器量能男ノ尻ヲ高クカラケ、刀ノ鏢本ヲク  
ツロケ、少モ油断セスシテ通ケル処ヲ、石ノ陰ヨリ唯一打ニト心  
懸テトビ懸テ打ト討処ヲ、心得タリトテ抜合、烈ク切テ廻ケル  
程ニ、彼辻切セシ男、請太刀ニ成テ無詮方思ヒケン、引脱シテ逃  
去ケルヲ、跡ヨリ急ニ追懸ケレトモ、数多在ケル石ノ間ヘ逃隠テ  
不見成ヌ。「腰拔奴メヲ遁ス間敷者ヲ」ト云テ、心緩ミ怠リ通ケ  
ル所ヲ、彼辻切セシ男、先ヘ廻リ、石ノ間ニ隠居、油断シテ茫然  
ト通ケル処ヲ、唯一打ニ切伏ケルト也。去ハ、源義経、衣川百首  
御詠歌ニモ「軍ニハ勝テノ後ヲ油断スナ勝テ甲ノ緒ヲシム」ト云  
トアリ。最至極セリ。此旨了得仕給ヘ。

①製↓三本共通するが、「世」とあるべきか。また同じ行に（蜷川）  
新左衛門、次の行には新右衛門とあるが、新右衛門が正しい。

一 寛永ノ比、仙石越前守家頼ニ、篠田源之丞ト云者アリ。此者ハ器  
量勝人、股ノ長サ六寸指ヲ以テ三寸取ケル故ニ、三六寸ト云異  
名ヲ付テ呼ケル由ヲ云リ。然ルニ、越前守殿、其比、毎度追鳥狩  
被遊ケルニ、此源之丞モ随分精力ヲ尽テ指働拵ギケル①共、鳥  
ノ一ツヲモ不執、無念ノコトニ思ヒケレトモ、不仕合ハ不及是非  
所也。然ルニ、越前守殿、諸人ニ精ヲモ可為出ト被思召ケル歎、  
「今度ノ追鳥狩ニハ雉子ヲ執タラン者ニハ褒美ヲ執セン」由ヲ被  
仰出ケルト也。故ニ、諸人一際ニ精ヲ出シ働ケルト云リ。源之丞  
モ雉子一ツ執タリ。是ヲ傍ノ人ニ為執ケルニ、傍ノ人ノ云ヤウ、  
「其方何ソヤ執給フ由ヲ云テ上ケ給ハサルヤ」ト云ハ、「少シ心得  
ノ侍ル。先貴殿ノ執給フ由ヲ云ツテ上給ヘカシ」ト云ハ、彼者指  
上褒美ヲ拝領セシト也。如此雉子ニツ迄人ニ遣シテ褒美ヲ為得ケ

ルト云へり。其後、越前守殿、「今度ハ鳥ヲ沢山ニ執給フ」ト喜  
悦不斜。然ルニ、歩行横目ノ者申ヤウ、「篠田源之丞モ雉子ニツ  
執タルヲ慥ニ見ツル」由ヲ云ヘトモ、越前守殿ハ其一ツヲモ不  
指上、如何仕ツルソト御詮議有テ大形売ツル物欤。私宅ニテ料理  
仕ツラン。此二ツノ内ヲハ不可出。左有二於ハ、即時ニ可有成敗  
者ヲ」ト御立腹有テ、討手兩人被仰付、源之丞ヲ被召出被逐<sup>②</sup>御  
穿鑿ケルヲ、源之丞云ヤウ、「如何ニモ雉子ニツ執申スコト必定  
ニテ侍ル。兎角ニ私ノ不仕合申上様モ無之事ニテ侍ル」ト云ヘバ、  
「扱、雉子ヲバ何方ヘ遣ケルソト御詮議有ケレバ、御穿鑿ノ上ハ  
兎角非可隠、誰ト誰トニ遣シ侍ル。彼者トモモ色々辞退仕候ヘト  
モ、私存ル子細アリ。平ニタト相頼候テ遣シ申侍ル」ト云ヘバ、  
「其方ニハ如何様ノ義ニ依テ、直指上不申シテ人ニハ為執ケルソ」  
ト被仰出ケル。其時、源之丞云ヤウ、「常々随分ト存シ精ヲモ出  
シ侍レトモ、不仕合ニテ雉子一ツヲモ不執無念ニ存候トモ、不及  
是非処也。然ルニ今度鳥ヲ執タラン者ニハ御褒美ヲ可被下ト有之  
ニ付テ、諸人一入精ヲ出シ侍ル。私不仕合ニテ鳥ニツ迄執侍レト  
モ、常ニ鳥一ツヲモ不執候テ、今度執タラン者ニハ御褒美可被下  
ト有之ニ付テ、諸人一入精ヲ出シ侍ル。私不仕合ニテ鳥ニツ迄執  
侍レトモ、常ニ鳥一ツヲモ不執候テ、今度執タラン者ニハ御褒美  
可被下ト有之ニ付テ、精ヲ出シ鳥ヲ執タルヤウニ侍ルモ、曾ハ無  
面目存侍ル故ニ、人ニ遣侍ル段、立御耳侍ル上ハ、不及是非処也。  
比上ハ如何様トモ被仰付次第」ト云ヘバ、越前守殿、「此源之丞、  
常々行跡追鳥狩等働ノ様子、友傍輩共ニ御尋有ケルニ、常々実貞  
ニ御奉公ニ精ヲ出ス物ニテ侍ル」ト云ヘバ、「此段委細ニ被聞召  
届、最神妙也。弥向後実儀ニ御奉公相勤候様ニ」ト被仰出ケルト  
也。源之丞、其比ハ未切米取ニテ有シガ、一兩年ヲヘテ百五拾石  
ノ所領ヲ給ヒシト云々。

『功名咄』六（下巻ノ下）

二、禍イ還テ幸トハ成タル者欤。去ハ、三社ノ御託宣ニモ、「正  
直ハ雖非一旦ノ依怙、終ニハ蒙日月ノ憐」トアリ。此旨了得仕給  
へ。

①金も「ル」とするが「レ」とあるべき所。②逐↓逐（金）

一 関東戦国ノ時分、本来ハ足利家ノ侍ニ荒井市正ト云者、宇都宮殿  
へ降参仕ケル処ニ、家中ノ面々ヨリ使ノ一人モ下来。最傍輩一人  
モ不見舞コト見苦敷カリシ故ニ、此市正、物具ヲ堅メ、馬ニ乗り、  
辻々ヨリ銘々ノ宿所ヘ下人ヲ遣シ、「荒井市正ニテ侍ル。降参比  
興者ト被思召方於有之ハ、是へ御出候へ。尋常ニ可討果由ヲ云セ、  
宇都宮ノ家中ヲ一遍ニ廻リ、直ニ可立退ト仕タリ。故ニ、宇都宮  
ノ家老方ヨリ使ヲ遣被申分最至極ニ侍ル。此方ノ誤ニテ侍ル。被  
有御堪忍侍」ト云シ。依之家中ノ面々モ、「見舞モ仕音信ヲモセ  
シ」由ヲ語ル。

右ノ物語ハ、貞享三丙寅年三月十七日早旦ノ夢想ニ見タリ。夢中  
二人ト対談セシニ、智恵才覚ハホシキ者也。譬ハ赤裸ニ成テモ、  
智恵才覚サヘアラバト云シニ付テ、右ノ物語ヲ正敷夢ニ見タリ。  
神カケテ偽ニ非ズ。

誠以テ、覚有才智、又有間敷コトニモ非ズト思量シテ、爰ニ書付  
侍ル。殊ニ宇都宮ノ明神ハ柿本ノ人丸ヲ奉崇所也。吾産社モ則此  
宇都宮明神ヲ奉移ト云伝ケレハ、御一躰也。左有バ、我為子孫覚  
有草案ヲ書綴ニ依テ、為夢知給ヘルカト感信スル処也。

一 寛永十四丁巳<sup>①</sup>・十五戊寅兩年、肥前国嶋原・肥後国ノ内天草兩所  
ニ、那蘇宗起一揆構、城郭一揆ノ大将ヲハ、大矢野四郎太夫時能  
ト云テ、生年十六才成シトカヤ。九州ノ諸將以大軍數日責之給へ  
共不落。剩、江戸ヨリ下向ノ大將板倉内膳正殿ハ、力攻シテ被討、  
石谷重藏深手ヲ負テ引退ク。後ヨリ追テ被仰付、松平伊豆守殿・  
戸田左門殿兩人下リ給フト云トモ、城内弥一和シテ、責ル度毎ニ



軍勢多不被討ト云コトナシ。其節、戸田左門殿家頼ニ、磯崎猪右  
エ門ト云者、城責シテ堀ヲ乗越ル処ヲ、城内ヨリ鉄炮ニテ打落ス。  
猪右エ門ガ胸板ヨリ雁金骨ノ外へ被打抜ケル程ニ、即時ニ息絶  
ケル処ニ、其名ヲハ不聞、傍ナル武者綿上ニ付置タル振葉ヲ水ニ  
入テ振出シ為吞タリケレバ、息出次第第二氣モ付テ小屋ニ帰り、其  
手平癒仕タリ。故ニ此藥ヲ懇望シテ習受、一代秘藏シテ子孫ニ伝  
ル者也。

吾是ヲ窃ニ盗出写執者也。去バ、聞伝孔子ハ、「盜泉ノ水ヲバ其  
名ノ穢タルコトヲ忌給ヒテ不吞給」ト云ヘリ。然トモ、武ノ道ヲ  
伝ル便タラバ、神モ免シ御座、海賊ヲモ船軍ノ謀棟ヲ思テ習フ者  
也。誠ニ、是ハ花盜同前ニ花奢ナルコト也。陰兵ノ術モ元來ハ盜  
ニ遊行覚ヒシヨリ、初テ窃盜ノ道ヲハ得タリトカヤ。藥方左ニ  
記置所也。穴賢。

#### 大伴ノワタカミ藥

- 一人参 五分 白水ニツケキサミテ少シ炒ル
  - 一 当販 五分 酒ニツケキサミアブル
  - 一 川芋 五分 其俣キサム
  - 一 生地黄 五分 其俣キサム 鉄ヲイム
  - 一 川骨 五分 打クタキアブル 鉄ヲイム
  - 一 大黃 五分 キサミアフル
  - 一 黄芩 五分 キザミアフル
  - 一 黄連 五分 キザミアフル ケヲ去
  - 一 白木 五分 白水ニ付上皮ヲサリアブル
  - 一 木香 五分 其俣
  - 一 肉桂 五分 上皮ヲ去
  - 一 桂心 五分 上皮ヲ去
  - 一 丁子 三分 其マ、
  - 一 井草 二分 上皮ヲ去 アフル
- 以上

右調査シテ袋ニ入テ、具足・綿上ニ付ルト云ヘリ。故ニ綿上藥ト  
ハ云之。去ハ、大友殿ト云シハ、九州ニテ豊後ノ屋形ト云テ、鎌  
倉殿時分ヨリ豊後・豊前兩國ヲ数代領給フ。高麗陳ニテ其働悪敷  
シテ改易セラレケルガ、関ヶ原合戦ノ時分、治部少方ニテ於豊後  
国揚旗ケレトモ、黒田如水ト同国石垣原ニ於テ一戦ニ討負、一家  
断絶スト云々。

①丁巳↓寛永一四年は「丁丑」である。

一 平野遠江守殿甥ニ、平野弥次工衛ト云者アリ。其時ノ主人ヲハ不  
覺、於撰州大坂天王寺表一戦ノ砌、五間計有之高岸ノ際へ乘懸タ  
リ。「廻テ懸ハ、一、三町モ可廻。如何ハセン」ト思ケルガ、「馬  
ヲ為飛タランニハ馬損スルトモ、其身ニ不可有怪我」ト思量シテ  
高岸ノ際へ乗寄、能馬ニ様子ヲ見知セテ乘戻シ、二、三返輪乗ヲ  
仕テ諸鎧ヲ合テ乘懸為飛ケルニ、無何ノ造作トビ、落敵陳ニ馳  
向ケルト云々。

誠ニ、此弥次右エ門、勇士剛強ナルニ依テ、覺有開ケ敷場ニテモ  
馬ニ為飛タランニハ、其身ニ不可有。怪我ト云コトヲ思出シタル  
コト、微妙ト可云者欤。去ハ、覺有至難所平生躰ニ於テモ、柔弱  
ナル心ニテハ、中々難越者ト知ヘシ。況ヤ戰場ニ於テモ、其上、  
此弥次右衛門ガ聞働時ハ、可思出者也。無左有一間岸へ乘懸タリ  
トモ、可為当惑者也。去ハ、世々ノ人、他人ノ働ヲバ雖怪思ト吾  
前ニ行迫テハ、思様ニハ不成者ト可知。此旨思量仕給へ。

一 浅野内匠頭家頼ニ、原田角之丞ト云者アリ。此者ハ、元來ハ土佐  
国長曾我部土佐守殿御乳人ノ甥ニテ有シガ、主ノ長曾我部殿、濃  
州関ヶ原合戦ノ刻、西方ニテ有シ故ニ、自ラ窄流ノ身ト成給フニ  
依テ、四国ニ在之所ノ家頼共ニ残留流ス。故ニ右之角之丞カ親モ、  
与州今治辺ニ蟄居ス。然ルニ、可送年月依無便、此角之丞十五才  
ニシテ、其比、今治ノ城主藤堂和泉守殿家中へ、米四斗ヲ給分ト

シテ、四、五年契約仕テ、年季奉公ニ出シタリ。然ルニ其身剛強ニシテ、逐年季和泉守殿所替ニテ、勢州阿野津ニ移給フニ供シテ勢州ニ移リ、若党ニ経上リ、足輕ヲヘテ歩行衆ニ成シトカヤ。夫ヨリ、倍臣トハ云ナカラ、大坂御陳ノ時分ニハ、小森伊豆ト云シ人ノ内ニ中小性分ニテ有シトカヤ。然ルニ此角之丞、大坂冬御陳ニハ藤堂殿手先ニテ働シニ、大坂城へ寄衆竹束ヲ以テ仕寄ケルニ、去ハ藤堂殿家中ノ面々、五間三間ツ、知行高二応ジテ、一並ヒニ竹束ヲ附ケル処ニ、或時、佐伯権左ト云者、「惣並ヨリ五間計リ先へ張出竹束ヲ附ケル程ニ、惣並ニ為引込ヨヤ」ト云ケレトモ、「為出」ト云テ、不為引込。諸人はニ腹立テ、佐伯カ竹束ヨリ五間計出シテ竹束ヲ附タリ。佐伯見之、我竹束ヲ崩シテ、惣並ヨリ十間計出シテ竹束ヲ附ヌ。如此我不劣ト先へ附持行俣ニ、最前ハ三町有之シ所ヲ、一夜ノ内ニ城ノ堀際七間計リ迄附寄タル故ニ、城内ヨリ鉄炮ヲ放コト如雨降。其時、小森伊豆仕寄竹束一束並ニハ附タレトモ、目毎ニ置所ノ竹束四、五束不足セシ故ニ、足輕ノ小頭一人、足輕一人、右之角之丞以上三人、竹束一束宛肩ニ置テ、竹束ノ外ヲ廻テ、竹束ノ目ヲ塞、立帰ラントセシ所ヲ、城中ヨリ如雨降放懸ル鉄炮、小頭ガ股ニ当テ足不立。其時、此角之丞、小頭ヲ肩ニ引掛、足輕ニハ小頭ガ足ヲ為持テ引退シト云リ。然レトモ、未夕目ニ置所ノ竹束二束不足シ、故ニ竹束ノ内ヨリ階子ヲ指掛、角之丞自身竹束ヲ持テ登リ、両度ニ二束無事故、目ニ竹束ヲ置テ仕舞ケルトカヤ。近所ノ武士見之云ヤウ、「其階子我ニモ少シノ間借給へ。竹束二目ヲ置所ノ侍ル」ト云。角之丞云ヤウ、「階子ヲハ借侍ルベシ。乍去、我登シヲ油断ヲシテ、打外タルト無念ノコトニ思ヒ、鉄炮ニ火繩ノ掛テ待ヘキ俣危侍ル。今暫時過シテ登給へ」ト異見スレトモ不用、階子ヲ借テ登ケル所ヲ、如案真唯中ヲ被通テ、真逆様ニ落シトカヤ。「鉄炮ヲ以テ敵ヲ打」トテ、久敷ハ不侍シ者トソ。其後、大坂御和陸有テ、被成御掃陳。明ル春ノ末、此角之丞ガ老父、与州ヨリ勢州ニ来リ。「及晩年、

『功名咄』六（下巻ノ下）

其方コト遠国ニ置テ無<sup>ヒ</sup>便宜<sup>ニ</sup>思フ所也。与州ニ歸テ兔モ角モ親ノ先途ヲ見届ヨ」ト云テ、「是非共ニ暇ヲ取、与州ニ歸ラン」ト至撰州。大坂時節、又大坂竈城ニ窮テ被集軍勢ケレバ、「如此儀ヲ見捨テ、与州ニ趣ンコト、曾ハ不有武ノ本意」ト、達テ老父ニ断ヲ云ヒ、老父原田勘ケ由ヲバ与州ニ歸シ、其身ハ古主ナレバ、長曾我部殿へ參ケルト也。去ハ、老父角之丞ニ名残ヲ惜コト不斜。此勘ケ由モ壯年ノ時分、乱国タルニ依テ、数度ノ場数嘗有シ者也。故ニ角之丞、老父ニ問ヤウ、「我等ノ儀為指コトニ不逢侍レバ、我勇臆ヲダニ不知。臨戰場テハ、如何様ノ心ニテ侍ルソ。無心元侍ル」ト尋ケレバ、勘ケ由云ヤウ、「臨戰場聞<sup>ト</sup>等ク腰ノ抜ルヤウナル臆病者ハ、千人ニ一人モ希成者也。又火ノ中ニトビ入テモ、少モ不動如ク成勇者モ、千人ニ一人ナラデナシト知ベシ。其外ハ、大形同ヤウナル者ト知ルヘシ。然ルニ敵合五、六町隔テ我名字ト恥トヲ思出ス時ハ、仕損スル者ニ非ス」ト被語シトカヤ。其外、「聞テ聞テ氣昇シテ茫然ト成、又ハ色変シ五体ワナ、クコト、声震コト、前後不覺ニ見ル族ハ、世間ニ多シトカヤ。然トモ、如此ノ者ハ、我嗜ニ依テ、氣昇不為色不変、五体ワナ、カズ。声色不震、前後不覺ニ不見ヤウニハ可成者也。此故ニ、武士ハ第一ニ死習コトヲ吉トス」ト被云シトカヤ。扱、此角之丞、長曾我部殿ニ其筋目有シ故ニヤ、使番役ヲ被仰付ケルト云リ。五月六日、長曾我部殿人数、信貴野河原ニ備フ立堤ノ上ニ、鉄炮ヲ伏テ待シテ、寄衆藤堂和泉守殿也。去ハ、和泉守殿侍大将ノ内ニ桑名弥次兵衛ト云者アリ。此者、元來ハ長曾我部殿普代ノ侍也。故ニ藤堂殿、須名ト云所ニ陳シ給フ時分、窃盜ノ兵ヲ以テ、其地へ夜討スベシ。様子可申越旨被仰遣ケレバ、如何思ヒケン、「須名ハ殊之外足場惡所也。重而自是注進可仕」由申来リシトカヤ。然ルニ藤堂殿、先備半分引分レテ、左ノ方モミ合テ懸来故ニ、長曾我部殿、「アレハ桑名弥次兵衛ニテハ無力駈入カト覺ソ。見テ

參レ」ト有シ時、右ノ角之丞承テ、敵備二十間迄馬ヲ乘懸見テ帰リ、「弥次兵衛ニテ侍ル。駈入サウニ侍ル」ト云ハハ、長曾我部殿、「矢留ヲセヨ」ト被為下知ケル。依之、矢留ヲシテ待処ニ、寄手備ノ内ヨリ武者二人、三十日計ノ異風物ヲ以テ五間計走出、間十間程ニシテ味方ノ備ヘ放懸シ俛、大坂方モ一度ニ鉄炮ヲ打懸、相懸ニ懸テ攻戰。然ルニ和泉守殿先懸ノ歷々、藤堂仁右衛門・藤堂采女・藤堂新七・桑名弥次兵衛、其外彼是七、八人並枕テ討死ス。依之、惣軍四、五町追討ニ仕タリ。然ル所ニ、最前寄手引分テ跡ニ残シ、渡部勘兵衛、被追崩味方ノ勢ニ指違テ、長曾我部殿、最前陳シ給ヒシ信貴野河原ニハ、柔弱ナル者、又ハ雜人原残り居タル所ヘ勘兵衛懸來リシ程ニ、石ヲ以テ卯ヲ打ニ等、長曾我部殿、裏切有ト聞テ引返シ給ヘバ、渡辺モ又、指違テ引退シトカヤ。其節、此角之丞モ、道明寺村ノ構ノ橋ノ上ニ於テ、敵一人突倒シ、水堀ノ内ニシテ首ヲ取シトカヤ。扱、長曾我部殿、本ノ陳所ニ返リ陳シ給フ所ニ、藤堂殿家頼ニ梅ヶ原頼母・玉置太郎助ト云兩人、梅ヶ原ハ黄シナヒ、玉置ハ尾花ノ指物ニテ手々ニ提首、大坂勢ノ内ニ紛テ居タリ。此角之丞ハ、近曾迄藤堂殿家中ニ居タリケレバ、能見知タル故ニ見出シ、是ヲ附廻ケルヲ、兩人モ是ヲ見テ、梅ヶ原ハ右ノ方ニ我馬ノ在之ヲ見テ、其方ヘ立退、馬ニ乗テ引。玉置ハ左方ヘ引退所ヲ、角之丞、「為遁間敷」トテ追懸行ニ、玉置執タル首ヲハ下ニ置、弓ヲ以テ射払ニ依テ、不被近付、玉置首ヲ執テ引退。此故ニ、角之丞思ヤウニモ不成シテ慕行ニ、玉置、信貴野堤ヲ登越ヌルニ首ヲ持、膝ヲ押テ登ル所ヲ、角之丞後ヨリ走懸テ、鎗ヲ以テ突ニ仕タリケレバ、太郎助ガ内脰ヘ突込ケレトモ、不当シテ無難首ヲモ不捨、堤ヲ登越テ我馬ノ在ニ打乘引退。角之丞ハ我鎗ヲ取テ見ルニ、魚打鎗ノ如ク曲リタルヲ押直シ、猶追懸ル処ニ、藤堂殿家頼二人乗込テ討死ス。一人ハ其名字ハ不覚、大坂勢ノ右ノ手ヘ乗込、鎗鎗ヲ以テ大坂勢十人計ヲ十間計卷リ込テ討死ス。渡部作左エ門ト云者ハ、左ノ方ヘ懸來、右ノ角之

丞ニ立向処ヲ、其名字ヲハ不覚、信貴野堤ノ上ヨリ投突ニ仕タリケレバ、作左エ門ヲ相突ニ突落ス故ニ、投突仕タル武者ハ首ヲ執、角之丞ハ我鎗ノ曲タルヲ捨テ、作左エ門ガ鎗ヲ執シトカヤ。扱本陳ニ歸居ケルト也。其時長曾我部殿、我勢ヲ二ツニ分テ、渡部勘兵衛ヲ押ヘ、和泉守殿籐本勢ト有無ノ一戰ヲ可決ト被巧ケレトモ、寄合勢又ハ軍法正シカラサル故ニヤ、一円ニ不分。長曾我部殿、彼方ヘ御座バ彼方ヘ來リ、此方ヘ來リ給ヘバ此方ヘ來リ、無詮方被見ケル。覚有ケル処ニ、井伊掃部頭殿備ハ、遙ニ遠ク見ヘケル所ヨリ、押太鞆ヲ鳴懸來勢ノ夥數見ケルニ依テ、味方ノ軍勢共戰勞タル上、恐怖色變故替ル方便モナク、戰共不可有利ト思量仕給ヒ、軍勢ヲ引入給フト云リ。其節、陳場ニ鉄炮ノ玉葉箱ヲ落シ置ケル程ニ、角之丞是ヲ取テ帰、足輕ニ渡セシト云リ。扱又、陳場ヨリ大坂ヘノ道筋、久宝寺ノ村中ヲ通ルニ、角之丞ハ久宝寺村ヲ抱保給フト心得テ、久宝寺ノ入口ニ城戸ノ有シヲ、押塞繩節二ツ迄結ビシニ、其間惣軍引退ケル俛ニ、跡ヨリ追付テ行処ニ、久宝寺村ヲ行離タリケレバ、早其所ノ母衣武者一騎脇道ヨリ馳來ル。此武者ヲ後ニ尋ル藤堂殿ノ内海六郎左エ門ト云者也ト云リ。扱、長曾我部殿、惣軍ヲ為引自身殿ヲシテ退給ヒケルニ、長曾我部殿、鎧ノ鼻通ニ家老兩人騎馬ニテ供ス。一人ハ名字ハ不覚、一人ハ長曾我部主水ト云シ者也。角之丞モ其跡ニ附テ退シトカヤ。去ハ、角之丞モ日比達者ニハ有ケレトモ、一日戰勞タル故、右兩人如<sup>レ</sup>不知馬ノ尾ニ取付、是ヲ便トシテ被引テ退シトカヤ。翌日七日ニモ、長曾我部殿人数、橋本ト云所迄出勢有テ、敵合モ遙ニ遠リケレハ、入民家弁當ヲ遣給フニ、大坂ニ當テ煙立登ケレハ、初ハ手過カト云所ニ、所々ニ煙ノ見ケル程ニ是唯事ニ非ス。可為逆心。長曾我部殿、大坂ヘ引返給ヲ角之丞ハ跡ニ残り、弁當ヲ靜ニ取納、繩ヲ付テ、其家川ニ掛作ナルニ依テ、川ヘ下置シトカヤ。是ハ以後、立掃取キト思量セシ所也。扱、跡ヨリ追付テ供セシニ、未大坂ヘ行着サル内ニ早城落タリトテ、落行者雲霞

ノ如シ。故ニ、主従彼方此方へ被押隔、別々ニ成テ落行ケルト云々。

一 此角之丞、後ノ物語ニ、今ニモ戦有ラハ、人ヲ討ヘシト思フ。首執コトハ、如何ニ心元ナク思フ所也。去ハ、信貴野ニテ首ヲ取テ、何トソシテ今一ツト心懸ケレトモ、終ニ不取シテ帰シ。鍵ノ塩首際ノ細キハ悪シ。塩首ノ丈夫ナルヲ好トスト云リ。

一 又、後ノ物語ニ、角之丞大坂以後、彼内海太郎左エ門ニ云ヤウ、「大坂信貴野ニテ後<sup>ヲ</sup>ロノ心ヲ思フ時ハ、敵ノ後レタル時ハ、大ナル可為働者也。後ロニハ敵跡ヨリ切突ヌルトモ、可顧ヤウモ無之者也。又、血ニ道有トテ、惣軍ノ引退脇道ヲ引分テ、退者ヲハ跡ヨリ追討ニスルコト最安シ」ト語ニ、六郎左エ門カ云ヤウ、「左様ノコトトハ世上不知之。必不可語給秘密ノコト也」ト云シトカヤ。

一 後ノ物語ニ、竹束ヲ附シ時、「小頭ガ鉄炮ニ当シ時、我負テ足輕ニ足ヲ為抱引退シコトハ、我兩人ヲ楯ニ突タル道理也」ト被語シ。最左モ有ベシ。然トモ、此コトハ其心根卑賤ニシテ悪シ。去戰場セハシキ所ニテ、味方ノ手負タルヲバ引掛退ハ高名也。然ルニ、不入心付ニ依テ、私ニ成テ悪シ。去ハ、「己ヲ捨テ礼ニ帰ルヲ仁ト云」ト論語ニモ見ヘタリ。

一 此角之丞若キ時分、上意有ヲモ兩度迄仕タリトカヤ。其物語ニハ、「何トシテモ其期延引ニ成タガ物也。故ニ、其數居ヲ不越サ内ニ可討。又ハ、此者ヲ取所ヲ可討ト云如ク心ニ限ヲシテ討者也」ト語シ。最左モ可有コト也。

一 長曾我部殿、弁当ノ跡ニ有シヲ隱置、後ニ執シコトヲ語テ云ヤウ、「其時モ我ハ一円死スヘキト不思シ」ト云シ。

『功名咄』六（下巻ノ下）

誠ニ、不敵ナル男ハ何モ左様ニ思フ者ト見タリ。以後、浅野内匠頭殿ニ五百石ノ所領ニテ足輕大将ニテ在シガ、及老年迄勇氣逞シテ、能武士ノ手本ニテ有シカトモ、幼少ヨリ卑賤ニ長生仕タルニ依テ、其品賤シキコトモ多カリシ者也。故ニ、其働ヲ勤信シ、其心根ニハ加勘弁執用給ヘ。穴賢。

一 關東戦國ノ時分、水野谷伊勢守殿ハ結城晴朝ノ幕下ニテ、常州下館ト云所ヲ二、三万石領知仕給ヒケルト云リ。然ルニ或時、結城殿出陳有テ、對陳良久カリケルニ、伊勢守殿所用ノコト有テ忍タマヒ下館へ被歸ケル折節、結城殿、小屋廻リヲ仕給ヒケルニ、「伊勢守ハ如何ニ」ト御尋有ケルニ、家頼ニ高垣勘左エ門ト云者、罷出申上ケルヤウハ、「伊勢守儀所用有テ、忍テ下館へ罷歸リ侍ル。跡ニテ御用モ侍ハ、此高垣ニ承リ侍ルヤウニト殘置侍ル俛、不依何コト被仰付侍ルヤウニ」ト無憚所申上ケル所ニ、晴朝以之外ニ御立腹有テ、「左有ハ不依何事、水野谷ニ云付ルコトヲバ、其方相違侍ルヘキヤ」ト被仰出ケレバ、「如何ヤウノ儀ニ侍ルトモ、御意次第ニ侍ル」ト申上タリケレバ、「左有バ足下ニテ腹ヲ切レ」ト被仰付ケレバ、此勘左エ門、「畏リ侍ル」ト云ツテ、不為居直モ腹抓切テ失ヌトカヤ。依之、前廉被下置タル簾幕等ヲモ被取返給ヒケレトモ、身代ニ無<sup>レ</sup>恙モケルト云ヘリ。夫故ニ、水野谷家ニ定タル紋ナクシテ白餅ヲ被付ケルカ。寛永ノ比ヲヒ、結城家ノ流へ断ヲ被申、得赦免、三巴ヲバ被附ケルト云々。

誠ニ、此勘左エ門ガ仕形、主ノ命ニ替ル者ハ、世間ニモ普ク多シト云ヘトモ、大形前廉ヨリ思設タル討死等也。然ルニ此勘左エ門ハ定テ不思設シテ罷出、当座ノ御立腹ニ依テ、被仰附儀ヲ不為居置モ切腹仕タル分野、自天大盤石ガ崩懸ルトモ、少モ如不動ナル男ト云ツヘシ。去ハ、常々死習テ不居、覺有時ニ心転倒シテ、当惑シテ見苦敷カルヘキコト必セリ。故ニ、武士ハ常々離生死行事第一トスト云リ。可生ニハ不省死、可死時ニ至ヌレハ、破タル草

履ヲ脱捨ルガ如ク捨ヘキト常々不思嗜、如此勘左エ門働ハ不可成者也。能々思量仕御座在。

一 寛永ノ比ヲヒ、奥州米沢城主上杉弾正殿家頼ニ、柿崎隼人ト云者アリ。此隼人ハ、越後謙信ノ内ニテモ猛將ト聞ヘテ、直江・柿崎・加治・竹ノ俣ナト云テ、信州川中嶋合戦ノ刻ニモ真先ヲ駆シ柿崎ノ末孫也。然トモ、主君ヲサヘ覚小身ニ成給ヒシニ依テ、尚以小身ニ成テ居ケル。隼人ガ一子柿崎助次郎ト云テ、生年十一才ニ成ケルヲ、米沢ヨリ一里計近辺ニ養源院ト云ケル禪寺ノ有ケルニ、為手習トテ遣置ケル所ニ、或時、住寺ハ米沢ヘ行給ヒケル留守ニテ、同宿僕從共円居シテ、「此子カ心ヲ引見ン」トテ云ヤウ、「此寺ノ後ナル山上ニ鎮守アリ。行程四・五丁、此堂ノ前ニ椎ノ木アリ。此大木ニ、地ヨリ一間計上 俣アリ。夜、此所ニ行テ登リ、俣ニ腰ヲカケヌル時ハ化物ニ逢ヌル」由ヲ云出セリ。僕從共ノ内、「彼行カ是行カ」ト云トモ、誰モタ「怖シ」ト云テ、「可行」ト云者ナシ。其中ニ、「助次郎様ニハ御士ニテモ、左様ニ怖敷所ヘハ御越アルコトハ成間敷」由ヲ云ヘハ、助次郎云ヤウ、「如何ニ化物有トテモ、行ニ不被行ト云コトヤ有ヘキ」ト云ヘバ、納所ノ僧ガ云ヤウ、「誠ニ助次郎殿ニハ流石勇將柿崎殿ノ末孫ナレハ、御越被成兼間敷者ヲ」ト云バ、同宿僕從一同ニ、「如何柿崎殿ニテモ今宵ノ如クナル闇夜ニハ成間敷。毎モ其椎木ノ俣ニ腰ヲタニ掛侍レバ、化物出ルコト必セリ。唯御無用也」ト云者モアリ。又、「如何ニ柿崎殿ニテモ成間敷」ト云族モアリ。其時助次郎、「左有ハ、其椎木ニ印ヲ付テ歸ルヘシ」ト云テ出ルヲ、指留ル者アリケレトモ、「如何ナル化物モ出ハ出ヨ」ト云テ、振切テ出ケルニ、大木生茂リ、イトゞ暗夜ニ道モ不見。然トモ、兎角ニ分登リケル処ニ、彼納所ノ僧、跡ニテ熊ノ泥障ヲ一ツ脇道ヨリ為持遣シ、「彼椎ノ木ノ俣ニ腰ヲ掛テ、頭ノ障ル程ニ下置ベシ」ト云遣タリ。助次郎、是ヲバ努々不知シテ漸彼椎木迄登

着、彼椎木ノ俣ニ腰ヲ掛居テ、木ノ枝ヲ引寄テ印ヲ付タリケレバ、何ヤラン頭ノ上ヘサガリケル俣ニ手ヲ揚テ見バ、何トハ不知、毛ノ障リタル程ニ、「去ハコソ」ト思、中脇指ヲ拔テ払、尚モ毛ノ当ルヲ思俣ニ引寄、二刀指テ不覺下ヘトビ下ケル俣ニ、本ノ道ヲ暗サハ暗シ、足サグリニシテ漸寺ニ歸リヌ。寺中ノ同宿・僕從共云ヤウ、「助次郎殿ハ、此暗夜ニ能御越有ケル物哉。印ヲハ付置給ヒケルカ。化生ノ物ハ出不申ケルカ」ト尋問ニ、「否、何コトモ無リケル」ト云ヘハ、納所ノ僧ガ云ヤウ、「何ソ出ヌト云コトハ有間敷。有ノ俣ニ宣ヘ」ト責ケレバ、助次郎ガ云ヤウ、「椎ノ木ノ俣ニ腰ヲ掛テ印ヲ結付ヌル時、何トハ不知、毛ノ生タル者、上ヨリ下リケル程ニ切払テ引寄、二刀指ヌ」ト語ルニ、同宿・僕從共、「扱々怖シキコト哉。ヨキ御手柄ヲ遊ハサレケル物哉」ト賞美ス。実ニ、諸人ノ云ケルモ偽ニ非スト云シ。

明ル早旦二人ヲ遣シテ見ケルニ、助次郎ガ云ケルヤウニ、右ノ毛泥障ニ切跡突跡ノ有ケルト也。其後、住寺米沢ヨリ歸リ、此コトヲキ、以之外立腹シテ云ヤウ、「扱々悪キ奴原哉。大事ノ士ノ一子ヲ愚僧ニ預置給フ所ニ、助次郎天然ト剛毅ナル生付ニテ、勇剛ナル働ヲ仕給ヒタレバコソ好シ。万一、少シモ臆シ給フ働アラバ、柿崎殿ヘ如何ハ可申成。武士ノ子ハ幼少ヨリモ大事也。先以納所ノ僧ガ行跡不届千万也」トテ追放仕タリ。同宿共ヲモ暫押コメ置タリ。助次郎ヲハ、「扱々若輩成ト云トモ、猛將ノ末孫程有之テ、善手柄ヲ仕給ヒケル物哉」ト賞美ス。隼人モ聞之、喜悅スルコト不斜。同宿僕共ノ咎ヲバ隼人請赦免トカヤ。此コト米沢ニ無隱、彈正殿ニモ此コトヲ被及聞召、十一才ノ助次郎ニハ、「扱々好仕タリ。行々御用ニ立兼間敷」トテ、助次郎ニ此時ヨリ五人扶持ヲ被下置ケルト云々。

誠ニ、「梅檀ハ二葉ヨリカウバシク、鶯ノ子ハ卵ヨリウナツク」ト云ハ、勇士ノ子ハ又左モ有ベシ。然リトハ云トモ、常々勇士ノ道ヲ不教、此助次郎ガ如キノ働ハ成ヘカラス。其上、勇士モ代々

一  
ヲ過テハ、勇士ノ家ニ高慢シテ、却テ不覺ノ名ヲ執者多者也。故  
ニ幼少ヨリ勇士ノ道ヲ不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>教。去ハ、世中ハミツレハカ  
クル習アレバ、久敷勇士ノ家ニ生シ者ハ弥以恐レ慎ミ、勇猛ノ心  
ヲ保給ヘ。少モ間断有時ハ、不覺ノ名ヲ執、恥辱ヲ永ク子孫ニア  
タヘシコト、口惜カルヘキ次第也。去ハ、三軍ノ師ノ恐ル、ハ、  
敵人ヲ恐ルルニハ非ス。敵ハ謀ノ不意ヲ恐、敵ノ謀ヲ討テ勝ンコ  
トヲ思ヘハ也。此旨能々思量仕給ヘ。

一  
関東戦国ノ時分、真壁安芸守久幹<sub>ト</sub>ノ御内室ハ、結城家ヨリ嫁給フ  
ト云リ。去ハ、此御内室、常ニ居給フ所ノ茶釜ハ一斗入ニテ有シ  
ヲ、太キ鉄火箸ノ先ニ掛テ、自由ニ揚下シ仕給ケル程ノ剛力ニテ  
御座セシト云リ。然ルニ、其比、宇都宮殿威勢強ク、関東ノ諸将  
何モ出仕々給ケルニ依テ、真壁殿ニ如何ナル故トハ不知、夫婦連  
ニテ被參ケル処ニ、何トヤラン様子危ク、座敷ノ内ヲモ難遁躰ニ  
被思ケレトモ、色ニハ不出、心ノ内ニハ刀ヲ不拔計ニ用心キヒシ  
ク座敷ヲ立テ被掃ケル処ニ、御内室、羽織着ノ小袖ノツマヲ高ク  
帯ニ狭ミ、結城ノ家ニ伝ル大原真守ノ薙刀ノ鞘ヲ脱シ脇ニ狭ミ、  
安芸守殿ノ後ヨリ送テ被出ケル程ニ、安芸守殿顧給テ、「カ、ル  
人中ヘハ不出給者也。為入給ヘ」ト再三強テ宣ヒケレトモ、アツ  
トハ宣ヒナガラ玄関迄送給テ、真壁殿ノ家頼共大勢供奉スルヲ見  
給テ後、奥ヘ為入給シト也。其後、安芸守殿宣ヒケルハ、「伝聞  
古ヘ和田酒宴<sub>サカモト</sub>ニ曾我十郎助成ガ舎弟ノ五郎時宗カ、障子一重ニ立  
タルヲハ千騎ノ味方ヨリモ心強ク頼母敷被思ケルト云シ事、実ナ  
ルカナ。今度、女共我後ニ立テ送リケルヲバ、千騎ノ味方ヨリ猶  
頼母敷心強ク被思ケル」ト被語シト也。  
誠ニ、可有左モ儀也。當時雖不有乱世、武士ノ妻女ヲラン者ニハ、  
覺有物語ヲバ為聞間甫敷者也。依之書記ニ侍ル者也。

一  
関東戦国ニテ、兄ハ弟ヲ殺シ、弟ハ兄ニ楯突、昨日ノ味方ハ今日

『功名咄』六（下巻ノ下）

ノ敵ト成ヌ。然ルニ或時、真壁殿、結城屋形ヘ被參ケルニ、酒宴  
良久ク何ト哉覽無心元様子也シ時、真壁殿ノ家頼ニ瀬尾・柴山ト  
云テ、剛強ナル男兩人在ケルカ、書院ノ前ナル高塀ヲ安々ト乗越、  
真壁殿招請有テ、酒宴ヲ仕給フ前ノ白洲ニ臆シタル気色モナク混々  
ト畏ル。真壁殿是ヲ見給テ、「推參者退レ」ト宣ヒケレバ、結城  
殿、「彼等ハ何者ソ」ト尋給ヒケレバ、「彼等ハ瀬尾・柴山ト申テ、  
於真壁数度ノ高名得名タル者共ニ侍ル」ト宣ヒケレハ、結城殿、  
「扱々勇壮ナル者カナ。是ヘ々」ト宣ヒケレバ、右ノ兩人少シモ  
不憚、縁ノ上ニ上ル時、兩人ニ御盃ヲ被下、「難有」ト云テ、頂  
戴ス。其後真壁殿、「扱々存知ノ外ナル大酒」ト式退シテ座ヲ被  
立ケレバ、右ノ兩人、左右ニ從テ退出仕給シト云々。  
誠ニ、震且ノ古變噲力数万騎ニテ堅メタル軍門ヲ推破テ、楚王ニ  
見ヘシ行跡ニ、其品コソ替レ志ハ等カラン者歟。此瀬尾・柴山ト  
云兩人ハ、真壁ニテハ足輕ノ少シ秀タル者也。然ルニ浮気者ト云  
テ、辻切・剛盜ヲ宗トスル卑賤ノ業ヲ好ミシカトモ、当此時ハ、  
真壁殿家頼ノ内ニ双肩ヲ者ナシト可云者歟。如此忠心有之故ニヤ、  
常々惡逆ヲモ真壁殿見許テ被指置ケルト見ヘタリ。伝聞新田殿ニ  
ハ、畑六郎左エ門ヲ被指置ケルコト、実ニ乱世ノ權謀治世モ莫思  
誨。穴賢。

一  
常州笠間ノ城主、笠間左エ門尉入道真休ノ家頼ニ、室節<sub>ムロノフサ</sub>弥生ト云  
者、常々馬ヲ秘藏シテ厩ヲ居間ノ前ニ拵置、常住我喰程ノ物ヲ馬  
ニモ喰セケルト也。此馬名馬ニテ、一戦有之鞍ヲ置ト厩ヲ躍出広  
庭ニヒレ伏、弥生物具シテ乗ト等ク思方ヘ馳行、敵前ニ於テ又ヒ  
レ伏、弥生ヲ下シヌ。弥生、鎧ヲ取テ敵ト戦時ハ、弥生ガ跡ニ附  
テ廻リヌ。弥生、敵ヲ討テ退ヘシト思フ時、馬ヒレ伏テ乗主、鞭  
手納ニモ不及簷本ニ歸ル。故ニ、其比、弥生栗毛ト唱之ヲト云ヘ  
リ。其後、真休ヘ不足ヲ云テ立退、北條氏康ヘ被召出、於相州小  
田原数度ノ戦ニ右ノ如ク戦テ、八ヶ年ノ内ニ二十七、八得感状ト也。

其後、「彼ガ働、偏ニ名馬故也」ト敵方ニ思量シテ、此馬ヲ討ヌ。依之弥生方働、如前方ノ不成ト云リ。此故ニ又小田原ヲ暇ヲ乞、笠間真休ヘ帰參ス。然トモ、此コトヲ氣病ニシテ病死シ畢ヌ。誠ニ、此馬勝タル名馬故トハ云ナガラ、常ニ馬ヲモ深寵愛スレハ能従物也ト云リ。常々ノ養育深、能恩愛ヲ絶シヌル時ハ、畜類スラ如此。益テ於人間ヲヤ。然トモ、物ヲ頼心有テ成之、以後恨悔ルコト出来ル物也。去ハ、仁徳アル君子ニハ、自ラ人物従来ルコトハ天ノ理也。此故ニ、孟子ニモ「愛レ人不レ親反ニ其仁。治レ人不レ治反ニ其智。礼レ人不レ答反ニ其敬」トアリ。此旨思量仕給ヘ。

一 元和寛永ノ比、佐振作左エ門ト云者アリ。此者、元来者九州肥後国加藤主計頭清政ノ家頼ニテ、七白石ノ領知ヲ被下則清政感状ヲ持シ者也。然ルニ、二代目ノ肥後守殿没落以後、窄人ト成テ、尾羽ヲ打カラシテ可為様ナクシテ、江州高木辺ニ馬ノ履ヲ自身ヤキテ出置、繼露命トカヤ。覚有所ヘ、細川越中守殿家頼、江戸ヘ使者ニ下リケル者アリ。此者、作左エ門ト古傍輩成ケルガ、江州大津辺ニシテ馬ノ履ノ破ケレバ、調コント云ヘリ。然ルヲ馬子ガ云ヤウ、「今少シ先ニ窄人ノ履アリ。是強シ」ト云テ調ケルニ、彼窄人ヲクソ頭巾ヲ着シテ履ヲ壳躰ヲ見テ、「御手前ハ佐振ニテハ無カ」ト問バ、「作左エ門ニテ侍ル。扱々久シク侍ル。扱何トシテカ持キ給ハサルヤ」ト問ヘハ、「引ヲ不持シテ如此成果ヌル」由ヲ語ケレハ、彼者、巾着ヨリ金子ヲ二分取出シ与テ云ク、「押付江戸表相勤テ可登。其内ニテ露命ヲ繼給ヘ。御身代ノ儀ヲモ相談可申ノ間、心安ク被思召侍レ」ト頼母敷云テ別ヌ。其後、彼者婦リケル節、立寄テ云ヤウ、「此躰ニテ居給ハンヨリハ、如何躰ニモ在付給ヘカシ。吾檀那細川殿ヘ何トソ才覚仕侍ルヘシ」ト云テ別ヌ。其跡ニテ、云残リタルコト有リト云テ、作左エ門支度シテ出ケルニ、妻女云ヤウ、「此月此日此歎難ニテ暮シ兼侍ルニ、如何様ニモ在付給ヘカシ。又何ヲカ宣ハン」ト引留ケルニ、作左

エ門云ヤウ、「故主清正ノ給ヒシ所領ヨリ加増ナクンバ出シト思フ。此コトヲ云残タリ」ト出ルヲ引留ケレバ、突倒テ追駈行ニ、追分ノ辺ニテ追付テ云ヤウ、「先刻云残シタルコト有。少シ成トモ加増ナクンバ出シ」ト云ケレハ、「如何ニモ心得タリ」ト云テ別ヌ。細川殿聞給テ、知行八百石ニテ呼下シ給ヒシト也。

誠ニ、此作左エ門、勇剛武士ト可云者歟。武士臨戰場、不惜一命、顕軍功名將ノ載感状、浪牢シテ自身鞋履ヲ作テ繼一命、雖困窮身ニ余ト不環<sup>②</sup>心義心正クシテ可云詞ヲ不外云シコト、実ニ至死不變トハ覚有コトヲヤ云ツベシ。此故ニ、神明ノ加護有コト必セリ。誠ナキ者ハ、神明ノ罰ニ当ルコト又必セリ。

① ↓シ(金)。② 環 ↓環(金)。

一 寛永ノ比、青山因幡守殿、数代ノ家老職ノ者ニ、猪野田万休ト云者アリ。此者ハ高麗陳・濃州関ヶ原・摂州大坂表、数度ノ高名ニ顕名者也。此者若キ者トモニ語サ<sup>①</sup>ルハ、「吾数度ノ戦ニ合テ覺タリ。敵味方五騎・七騎宛入乱シコロヲトモツケ<sup>②</sup>責合、鎚ニテ突合時ニハ、中々手前セハシキニ依テ、余所ノ働ヲ不知、脇ヨリ走寄テ突倒、切倒ヲモ不知者也。此所ヲ見澄テ走寄、度々高名ヲハ仕タリシ。此旨心得給」ト云シ。

誠ニ此万休ハ、勇剛ニシテ命ヲ露塵程ヲモ不惜故、心静ニシテ戰場ヲモ常住座席ノ行跡ノ如ク思フガ故ニ、覚有所ヲモ見付シ者也。去ハ、関東侍ニ大塚藤右エ門<sup>以後、稲葉丹後守殿へ被召出ケル</sup>ト云シ者アリ。此者、戦国ノ時分、首数六十計リ執シ者也ト云リ。去バ、「若輩ノ時分、臨戰場働シニ、二度三度迄ハ月夜ノ如ク覺シカ、次第々ニ心静ニ成テ夜ノ明ル如ク有シ」ト語りケルトカヤ。勇剛ノ武士ニテモ心騒シケレハ、物毎ニ難覚者也ト云リ。此故ニコソ武篇覺ノモノトハ云ナンメレ。

①サ↓「ケ」(金)。②トモブケ↓片ツケ(金)。

一 慶長・元和ノ比、加藤左馬助殿家頼ニ、河村権七ト云モノ、左馬助殿甥也。其上、数度勇剛頭名、二千余石ヲ領セシ者也。此者所用有テ在京セシ折節、四條ノ河原物ヲ見物セント歩行・若党二十人計、提重・茶弁当杯為持、夥敷躰ニテ平芝居ニテ見物セント也。然ルニ其齡二十四、五才計ノ片目ナル男、尻ヲカラケ、刀脇指十文字ニ横タヘ、四方ヲニラマヘ臂ヲ張テ、「スワトモセバ抜打ニスヘキ」ト刀ノ柄ヲ把テ芝居ノ中ヲ立廻リ、雜言ヲ吐テ、河村ガ見物ノ前ニ立立テ不動。権七ガ若党、是ヲ笑止ニ思テ、「何方ヘソ立退給ヘ」トサ、ヤキケレトモ耳ニモ不聞入。権七是ヲ見テ、使ヲ以テ、「不案内ニ侍レトモ棧敷モ広シ。是ヘ御立寄給テ茶ヲモ參リ侍レカシ」ト云セケレバ、「其時身ガコトニテ侍ルカ。是ニテ能侍ル」ト云テ不構。権七、「重テ友モ無嬉敷侍ル俛是非々」ト云遣ケレハ、「去ハ忝侍ル。參ヘシ」ト云テ来リヌ。扱、提重ヲ開キ、酒ヲ盛り、茶ヲ振舞テ以後、権七云ヤウ、「貴殿ノ躰ヲ見ルニ氣違トモ不見。又尋常ノ人トハ尚以テ不見。何トモ合点不行。先刻ノ為躰我ヲト是非誼誑ヲセン」ト仕カケ給フ。「吾ハ加藤左馬助内ニ河村権七ト申者也。貴殿ヲ討ント存知侍レバ、若党トモニ申付テ討コトハ安キコトニテ侍レトモ、無詮コトニ侍レハ左様ニハ不仕侍。貴殿ノ心こころ緒承度」ト打笑テ尋ケレバ、彼者云ヤウ、「扱々御恥敷候トモ、今ハ何ヲカ可包侍。吾ハ加藤吉太夫ト申テ、五條松原辺ニ罷在牢人ニテ侍ルカ、尾羽ヲ打梓①シ可期明日ヤウモナク糧ツキ又可頼方②ナリ。餓死ニ極リヌ。故ニ、空ク餓死センヨリハ、誼誑ニテ成トモ死センニハ不然ト思成シテ、今朝ヨリ誼誑ヲセント北野辺ヨリ此所迄雖經廻、誼誑ノ相手ナクシテ此ニ至リヌ。不存寄覚預御馳走辱侍ル」ト泪ヲ流シケレバ、権七、「扱々御物語承リ痛敷存侍ル。先以御身代ノ儀ハ我ヲ請取侍ルヘシ。御心永ニ被思召侍レ」ト云ヘバ、「扱々思召入

『功名咄』六(下卷ノ下)

忝侍ル」ト手ヲ合テ礼ス。覚有所ニ、暴慢者四、五人来テ芝居中ヲ暴行セシヨ、此吉太夫カ是ヲ見テ云ヤウ、「扱々愧はづかしキ奴原カナ。アレ追扱テ可掛御目」ト云テ立ヌ。権七、「無詮儀也。是非々無用ニ仕給ヘ」ト留ケレトモ、「唯今申ツル詞ノ偽ニ成侍ル俛追扱テ見セ申サン」ト、何ノ会尺モ無、芝居ノ外ヘ追出シケルト也。権七、此勇剛ヲ感信シ、以後弥馳走シテ、加藤左馬助殿ヘ所領百五十石ニテ被召出為案座ト云々。

誠此吉太夫、一度ハ雖為流牢、勇剛ノ志故ニ、河村権七ニ逢テ出世仕タリ。是コソ八幡大菩薩ノ御加護トハ可云者也。又、河村権七モ流石名將ノ家族ニテ、勇剛ニシテ情有コト、実ニ武士ノ本意トハ覚有コトヲヤ可云者歟。此旨思量仕給ヘ。

①梓↓兩本とも同字だが、「枯」となるべき所。②「なき」などが入るべき所。

一 寛文ノ比、加藤内蔵助殿家頼ニ、安井彦五郎ト云者アリ。此者ハ、児小性達ニテ懇ニ被召仕ケルガ、去バ内蔵殿ニ、「備前ノ正恒ノ三尺一寸有ケル刀アリ。此刀摺揚シコトモ無下也。汝ハ器量好男也。秘蔵シテ可指」ト云テ給シト也。然ルニ、其比、傍輩ニ下山瀬兵衛ト云児小性元服ヲ仕タリ。為其祝儀、武州江戸於目黒ノ茶屋ニ振舞ント云ニ依テ、彼兩人、牢人一人、主従六、七人彼地ニ行テ遊覧セシ所ニ、下人迄数盃ノ機嫌也。其内草履取一人、荷茶屋ノ許ニ行テ湯ヲ所望仕ケレバ、「安キ儀也」ト云テ吞セケルニ、又一人、「我モ喉ノ乾ケル俛吞ヘシ」ト云テ彼茶屋ニ所望シケレバ、「錢ヲ出給」ト云テ不吞。「以前ノ者ニモ吞セケル程ニ我モ吞ヘシ」ト云懸リケレバ、「笑敷コトヲ云者哉」ト打笑ケレバ、「是非不為吞カ」ト云テ、脇指ヲヒネクリ廻シケレバ、茶屋、「切テヨクバ切テ見ヨヤ」トテ首ヲ延テ懸リケルニ、彼者積テ抜打ニ首ヲ打落ス。依之、目黒ノ在家ノ奴原、鑓・薙刀・琴柱棒ナド引提テ追カケタリ。其時、安井彦五郎一人立留テ云ヤウ、「此コト我々



ノ知タルギニ非ス。相手ヲ可出」ト彼草履取ヲ三尺一寸ノ正恒ヲ以テ唯一打ニ打テ捨、引退ケル所ニ、目黒ノ奴原、「尚モ遁スマジ」ト追カケ来ルノ間、彦五郎、「証人ヲ出ス上ニ、愧キ奴原哉」ト、三尺一寸ヲ抜テ取テ返ス所へ、琴柱持タル男、真先ニ進テ彦五郎カ胸板ニ突当ル処ヲ、左ノ手ニテヲツ取テ三尺一寸片手打ニ大袈裟ニ切テ落ス。目黒ノ者トモ是ヲ見テ引足ニ成テ防戦ケルヲ、踏込々手下ニ二人切伏、手負不知數。然ルニ三尺一寸ノ正恒、敵ノ鎧ノ柄ニ切込、真中ヨリ打折、無力少シ引退。然トモ、此勢ニヲソレテ不懸。彦五郎ハ、獅子ノ齒カミヲ仕テ、味方ノ窄人ノ刀ヲ奪取テ又打テカ、ルヲ見テ、蛛ノ子ヲ散スガ如ク逃去ケル間、彦五郎モ暫息ヲツイテ云ヤウ、「日比内藏助殿ノ蒙御恩御用ニコソ不立。トモアレ却テ檀那ノ名ヲ出スコトノ無念サヨ。所詮腹切テ死ナンニハ不然」ト近キ浄土寺ニ入テ腹ヲ切ラント云所ニ、又目黒ノ奴原、此寺へ附入侍ルマ、「遁ス間敷」ト取巻テ、頭達タル者トモハ寺内ニ入テ、「腹ヲ切給ハ、見物セン」ト語カケタリ。住侶、彦五郎其外ノ人々ニ私語ケルハ、「腹切テ無詮義也。立退給フニハ不然。跡ヲハ愚僧ニ任セ給へ。切腹仕給ハ、沐浴シテ以後コソ湯ワカセナン」ト騒動ノ内ニ、一人モ不殘皆逐電仕タリ。目黒ノ者共是ヲ見テ、「住侶ノ内通ニテ落シ給フニヤ」ト憤云ハバ、「吾ハ一円不知。何ソヤ其方トモ、不遁ヤウニ番ヲハ不為シテ吾ヲ憤ソヤ」ト云テ不構。以後、此住侶ヲ奉行所へ訟ケルニ依テ、此僧ヲ奉行所へ被召出御穿鑿有シニモ、「吾ハ出家ナレバ左様ノ番ヲハ不仕。若切腹仕候へハ跡ヲ吊役ニテ侍ル。逃テ參ルヲハ不知候」ト被申ケレハ、公儀ニ可被仰付品モナク、増上寺ノ内源光院へ十余日御預、以後免許有シトカヤ。内藏助殿ニモ、此者トモ公儀ヲ憚給フ故ニヤ、江戸近辺ヲ御構御暇被下ケルト云々。誠ニ、此彦五郎ガ働、勇壯ト云器量ト云羨敷者也。刀ヲ打折、少引退シト云ヘトモ、窄人ノ刀ヲ奪取テ又打テ懸ルコト、古ノ美尾屋ニハ違テ勇剛ニ聞ケル。美尾屋モ覺有志シ有バ、今ノ世迄悪名

ヲハ殘サジ物ヲト殘多シ。去ハ、此彦五郎カ働、江戸中ハ不及申ニ、西国迄モ及、其沙汰コト不斜。又、此僧モ智覺第一ニシテ、以後吾科ニ不成所迄被為分別ケルコト、最深智惠ト云ヘキ物歟。此者①思量仕給へ。

①者↓旨(金)。

一 延宝・天和ノ比、浅野内匠頭殿家頼ニ、其名名字ハ不覺、福齋ト云者有。此者ハ、祖父内匠頭長直ノ時分、慶福ト云テ、アンマ取ノ座頭、數年被召仕ケルカ、福齋五、六才ノ時分病死ス。然ルニ慶福數年ノ旧功ヲ感シ被思召、母子御扶持方ヲ被下。福齋十二、三才ヨリ小坊主ニ成テ被召遣、自夫次第ニ成長シテ、二十才計ニ成俣ニ江戸御屋敷ニテ紙奉行役被仰付覺テ経四、五年ヲ。然ルニ其比、諸役人不殘有算用改依テ、福齋モ算用仕ケル処ニ、四、五百目不足出来、兎ヤ角トシテ三百目程ニ成テ、何トモ可為様ナシ。算用者ヲ頼テ兎ヤ角スレトモ、算用不合。然ニ有夜、福齋腹一文字ニ搔切、自身呻切テ失ヌ。故ニ目附・横目ノ者トモ、走付テ是ヲ檢見ス。然ニ福齋自筆ノ有書置。見之、「私儀親以來御厚恩ノ私、殊更幼少ニテ離親慶福候処ニ、母諸共ニ御扶持方被下成長仕候。御恩兎角ヲ可申上様モ無御座候。其上、私ニ不似合御役儀被仰付候故、随分出精相勤候。然ル上ハ、一錢ノ私ヲモ不仕候へ共、算用不足仕候段不及了簡候。私不調法愚鈍ナル生付故ト奉存候。此段何トモ申分可仕様モ依無之、如此成果申候」ト有之。役人トモ、不便千万ニ存シカトモ、可為様モナシ。其後、経數日、可捨置ニモ非スシテ算用仕ケレバ、彼方此方ヨリ落散セシ手形トモ出テ、算用合ヌト云々。

誠ニ、運ノ窮トハ云ナガラ、不便ナル儀也。此者、幼少ニテ離父、誰有テ云教又ベキ者ハ無レトモ、生付勇剛ナルニ依テ、最期最モ潔シ。其身不切ナル故ニ不入念。去ハ、度々内算用ヲモ仕テ戒慎恐懼ノ道理ヲ用ナバ、覺有難ニハ逢間敷者ヲト殘多シ。去者同家

ノ家頼ニ、先祖代々結構成役儀ヲ勤、歴々ナル筋目ノ男、七、八年金奉行役ヲ勤ケルニ、相役ハ近年ノ役儀ナレトモ、此方ヨリ申請ヒテ算用仕ケレバ、此男モ心ナラス算用セシニ、三貫目余不足出来ス。故ニ遠国他国ノ一類迄驅催ケレバ、一貫目余迄責寄タレトモ、次第二一家中ニ露頭セシニ依テ、流石無面目ヤ思ヒケン、備中水田ノ国重ノ一尺四寸有シハツ橋ト異名有之以脇指自害ヲバ仕タレトモ、吭少計突切、半死半生ニテ半日計有シガ、如何仕タリケン不知、其夜死ヒ①シトカヤ。去ハ、其身ハ律儀ニモ有カシ七、八年ノ内算用不為モ油断也。其上、母妻子等ノ結講ナルニモ可氣付所也。兎角善惡共如此成果シ時、鈍々布自害、先祖ニ似与恥辱。彼自害セシ脇指ヲハツ橋ト名付コト、様者八人ヲ並テ袈裟ヲ打シニ不残依為打落異名也ト云リ。覺有劍ヲ以テモ心ノ鈍々布ケレバ、吭一ツダニ不落。唯可恐ハ心也。或人ノ狂歌ニ、「思ヒキヤケサコソトヲレハツハシノ蜘蛛ニ吭ヲカキツバタ」トハ、如此云笑者モ有ケリ。誠ニ、武門ニ生レン②者可恐可慎。此旨思量仕給へ。

①ヒ↓セ(金)。②ン↓シ(金)。

一 貞享元甲子歲八月廿八日、於殿中稻葉石見守殿、堀田筑前守殿ヲ指殺給ヒシ。其濫觴ヲ尋ルニ当 公方綱吉公、為繼御世給ヒシ初、依有忠節經上大老甚高權威シテ奢ヲ極、誰有テ可諫者ナシ。此コト、上ニハ一円ニ不知召。悪行ハ夜ニ増日ニ増美女ヲ集置、此殿舎ノ額ヲ人參殿ト被書ケルト也。此心ハ、人間ノ氣ヲ甫用スルコト人參ニ不過、女色ニ同シト云義也。本庄ト云所ノ家屋敷ヲ私代金ヲモ多ハ皆筑州へ取込給ヘトモ、誰有テ詔者ナシ。諸大名並テ取入者ヲ執成、疎ヲ惡テ惡様ニ云コト耳多シ。依之、稻葉石州被思ケルハ、「當時治世ナレハ奉弑。君程ノ惡逆者希也。然ルニ、筑州君恩ニホコリ奢ヲ高クシテ妨ニ世政ニ、當時ノ可謂怨敵共者歟。如此長奢ハ世ニ恨者モ多ク、万一起逆乱コトアラバ危

『功名咄』六(下卷ノ下)

カルヘシ。又事ニ依テ筑州モ又為逆心コト無疑。如何ニモシテ奉諫言退筑州事ヲ思フト云ヘトモ、筑州尊敬ハ不止日々、筑州奢侈惡逆ハ長日夜故ニ捨吾身成共、此筑州ヲ退スハ天下大乱某也」ト思成給ヒヌ。此故ニ學士ヲ召テ捨身、忠信ヲ宗トセシ來曆ヲ混ト被尋ケルト也。或時、石州家頼ヲ召テ被仰付ケルハ、「近日与風屋敷替被仰付義モ有ヘシ。諸道具等当座入用ニ無之物ヲハ、以手引預置ヘシ。俄ニ引払時分、身輕ク引退様ニ内々用意スヘシ。其上、屋敷替ニハ面々ニ物モ入ヘシ。金銀ナクテハ不如意成ヘキ俛、当暮所務半分相渡候様ニ」ト被仰付、切府ノ者迄半分請取ヌ。覺テ經五、六日、八月廿八日、御老中有殿中列座処ニ、石見守殿中座シテ手ヲ突、「筑前守殿ニ御用ノ義有之、得御意度」ト宣ヘバ、筑前守殿立給ヘバ、石見守殿一、二問先立、御用相談ノ間へ同道シ、其間ノ口ニテ式退スル躰ニテ中腰ニ成テ待合、筑州通過給フ処ヘトヒ懸テ、混ト組一尺三寸ノ脇指ヲ以只中ヲ突通、混練ニ繰給フ。老中列座ノ処ヨリ見懸ノ所ナレハ、加賀守殿、豊後守殿走寄テ引退ントスレトモ不放。其時、堀田下総守殿走着給ヘトモ、茫々トシテ被居依テ、加賀守殿目引仕給ヘバ、「一脇指切付給ヘ」ト云ヘトモ不切。其時、加賀守殿、大左文字ノ脇指代金百枚、一尺五寸有ケルヲ以テ切付給ヘトモ、如何仕タリケン阿腹骨ニ、三枚ナラテハ不切。豊後守殿ニハ新身ノ脇指以一尺九寸切給ヘバ、阿腹骨一枚カ、リ別レタリ。然トモ、猶首ハ筑州ヲ不放、取付テ死セシトカヤ。

扱、石見守殿懷中ニモ書置アリ。其外、御納戸衆ニモ、「御用ノ書付也」ト云テ被預置ケルト也。石州ノ宿所ニモアリ。文言同前、是ハ死後ニ何トソ此存念達上聞、天下ノ私怨敵有思所。去ハ、筑州ノ悪行都テ十七ヶ條ヲ挙テ引証擲ヲ書付、如此悪行、雖為重過、誰有テ御諫ヲ可奉者ナシ。譬當時御諫ヲ申上候トモ、御奉用被成間敷模様也。有兎指置時者大乱端也。先比越後ノ老臣、双論ニ付テ阿部豊後守有名言。去ハ荻田主馬、「小栗美作力拳悪行ヲ主人

ニ為諫言共用給ハズ」ト云バ、豊州ノ曰ク、「左様ニ主君ノ讎ト  
思フ時ハ、老臣ノ身トシテハ何ソ美作ト指違死給ハサル」ト云バ、  
主馬流涙、「其段存付侍ラズ。無面目候」ト赤面スト承候。誠ニ  
道理至極ト存候。此故、筑州ニ何ノ雖無遺恨、討果候。死後可預  
賢覽者也ト有之。扱又、廿八日ニテ諸大名各為登城、雖為参列不  
知之。老中・御目附出給ヒテ、「稲葉石州乱心ニ付、堀田筑州手  
負給ヒ、御不快ニ付、今日御目見ハ不被為。諸候各被有退散候」  
ト有之、各退出ス。右兩人ノ死体ヲバ存生ノ躰ニテ、裏ノ御門ヲ  
潜ニ出セシト也。然ニ、初石州乱心ノ様ニ 公方様ニモ被為思  
召ケレトモ、御詮議有之程、筑州ノ顯悪行、石州ノ顯忠貞。依之、  
牧野備後守殿、石州ノ墓所へ被致参詣。然ニ、筑州ノ墓所ハ、先  
堀田加州墓所上野ノ内ニ有之。其傍ニ築ケルヲ、「他所へ可引」  
由被仰付ケル。依之、不心成他所へ被引ケルト也。此故ニ、石州  
ノ忠貞、筑州ノ悪逆、世ニ露顯スト云々。  
誠ニ、石州忠貞ハ、世々ヲ経テモ希ニモ難有忠信ト云ツヘシ。去  
ハ、乱世ニ軍ノ先ヲ懸、為君捨一命ヲハ最安カルヘシ。夫ヲモ軍  
ノ魁<sup>サキガケ</sup>ハ安ク、殿リハ難ト云シ。増テヤ如此治レル世ニ、為君捨  
一命致忠勤ヲコトハ、難カ上難トスヘキ者歟。此忠貞ヲ推察スル  
時ハ、流涙ノ義也。又、筑州ノ悪逆ハ、誰モ々可恐義也。得君恩  
者並テ不奢者希也。其内、細川右馬頭頼之杯ハ、無比類賢人ト云  
ヘシ。誰々モ得君恩者ハ、筑州ノ悪逆可恐可慎。此旨思量仕給へ。  
穴賢。